

# 会計史研究の国際比較

— *The Accounting Historians Journal* と  
*Accounting History* との比較分析から —

中野常男・橋本武久・  
清水泰洋・澤登千恵・  
三光寺由実子

- I はじめに
  - II 考察対象とする海外の学術誌と分析項目
  - III 研究領域別の特性
  - IV 地域別の特性
  - V 時代別の特性
  - VI 執筆者別の特性
  - VII 結びに代えて
- 補論 *Accounting History Review* の位置づけと今後の検討課題

## I はじめに

「会計」の歴史を取り上げた文献が現れるのはいつ頃のことであろうか。イギリスで刊行された会計関係の文献を見る限り、その嚆矢は17世紀前半の代表的な複式簿記解説書である Richard Dafforne の *The Merchants Mirrour*:…… (1635) に見出すことができる。彼の簿記書には“Opinion of Book-Keepings Antiquity”と題された論稿が含まれており、そこでは複式簿記の起源がギリシャやローマに遡ることができるという見解が提示されていた<sup>1)</sup>。ただし、当該論稿はわずか1頁にすぎず、会計史が、専門的に、特に単行書において取り上げられるようになるのは、19世紀半ばに刊行される Benjamin F. Foster の *The Origin and Progress of Book-keeping*:…… (1852) を待たなければならな

い<sup>2)</sup>。

他方、わが国では、明治初期に複式簿記を中心とする洋式簿記の導入を目的とした簿記の解説書が数多く出版されるが、これとほぼ時期を同じくして「会計」の歴史に関する著作も出現する。曾田愛三郎(編輯)『學課起源畧説』(1878)に収録された「記簿法 Book-Keeping」と、海野力太郎(纂譯)『簿記學起原考』(1886)である。曾田の論稿がわずか3頁強のものであったのに対して<sup>3)</sup>、海野の著書は会計史を専門的に取り上げた単行書であり、先に言及した Foster の著書に次ぐ、世界で第二番目のものと位置づけられる<sup>4)</sup>。

このような先駆的な業績をふまえて、わが国においても会計の歴史研究が本格的に醸成され、会計史に関する著作が徐々にではあるが現れるようになる<sup>5)</sup>。本稿の筆者たちは、これまでに3度にわたり科学研究費補助金の交付を受けて、わが国における会計史研究の展開に関する分析とデータベースの作成を継続して行ってきた。具体的には、会計史に関する著作に関して、わが国でもっとも長い歴史を有する会計専門学術誌である『會計』(1917～)に掲載された研究論文等、および、わが国で唯一の会計史研究の学会である日本会計史学会の『會計史学会年報』(以下、『年報』と略記)(1983～)に掲載された研究論文等の中から、会計史に関連する研究論文等を抽出し、それぞれの文献において考究されている内容を分析して、データベース化を進めてきた。これらの成果については、既に、科学研究費補助金の研究成果報告書とともに、中野・橋本 [1999]；中野他 [2004]；中野他 [2005]；中野他 [2006]；中野他 [2008]；中野他 [2009a]；中野他 [2009b]；中野他 [2013]；澤登 [2014]；中野他 [2015] において逐次的に公表している。

これまでの研究では、わが国における会計史研究の現在までの趨勢的な特性ないし傾向について、『會計』と『年報』に掲載された研究論文等を史料に用いて分析してきた。これに対して、本稿における研究では、上掲した一連の研究を継承しつつ、考察の対象を海外の会計史研究に転じ、海外の学術誌(ジャーナル)に掲載された会計史にかかわる研究論文等の考究内容について、わが国の研究論文等を対象とした従前の研究と同様のアプローチを用いて分析

を進めることにより、その趨勢的な特性を明らかにすること、そして、わが国のそれとの国際比較を行うことを目的としている。

## Ⅱ 考察対象とする海外の学術誌と分析項目

本稿で考察対象とする海外の学術誌は、*The Accounting Historians Journal* (以下、AHJと略記)、および、*Accounting History* (以下、AHと略記)の2誌である。

このうち、AHJは、アメリカのThe Academy of Accounting Historians (「アメリカ会計史学会」)の機関誌であり、1974年以来、年2回の頻度で発行され、会計史研究にかかわる最初の国際的学術誌である。その掲載内容は、会計プロフェッション、伝記、会計の変遷史、企業や政府などの会計主体のケース・スタディ、会計理論の展開過程、新旧研究の批判的検討や、その他に教育、税制、ディスクロージャー制度に至るまでの幅広い領域を網羅している<sup>6)</sup>。

他方、AHは、副題に*Journal of the Accounting History Interest Group of the Accounting and Finance Association of Australia and New Zealand*と記されているように、The Accounting and Finance Association of Australia and New Zealand (「オーストラリア・ニュージーランド会計・財務学会」)の会計史研究グループの機関誌である。同誌は、1996年に創刊され、年4回の頻度で発行されている。掲載内容は、会計の本質・役割・利用およびインパクトについての批評的・解説的な歴史研究を称揚し、また、あらゆる組織形態にわたる会計の歴史的発展についての議論の場を提供する国際的学術誌である<sup>7)</sup>。

両誌はともに、今日の会計史研究を代表する学術誌であるが、AHJが営利企業やそれと対比される政府組織など、伝統的な組織における会計を中心に幅広く会計史を論じる傾向にあるのに対して、AHは、あらゆる形態の組織を対象としつつ、より批判的な視点で論じられた論文を掲載する傾向にある。

わが国における会計史研究の特性ないし傾向を考察することを目的とした従前の研究では、『會計』と『年報』に掲載された研究論文等を史料として用い、

これらの分析結果に基づき作成した文献目録においては、「論文等の標題」, 「執筆者」, 「巻号 (発表年月)」, 「考究内容の要旨」, 「分類」の各欄を設け、それぞれの研究論文等の標題、執筆者名、掲載巻号 (発表年月)、当該研究論文等で考究されている内容の要旨、そして、個別的分類基準を組み合わせた複合的分類基準に拠る分類の結果を示している<sup>8)</sup>。

このうち、個別的分類基準とは、以下に示す三つの分類基準を言う。すなわち、(1)「研究領域別分類基準」、つまり、分析対象として抽出した研究論文等が、会計学を構成する主要研究領域のうち、どの研究領域の歴史を取り上げているかという基準、(2)「地域別分類基準」、つまり、研究論文等がどの地域の会計の歴史を取り上げているかという基準、および、(3)「時代別分類基準」、つまり、研究論文等がどの時代の会計の歴史を取り上げているかという基準、計三つの分類基準である。そして、これら三つの個別的分類基準を組み合わせた分類基準を、「複合的分類基準」としている。

#### (1) 研究領域別分類基準

- I 総 説 (会計通史, 会計史研究の方法論など)
- II 基礎理論
- III 簿 記
- IV 財務会計
- V 原価計算
- VI 管理会計 (経営分析, 財務諸表分析を含む)
- VII 監 査
- VIII 国際会計
- IX 税務会計
- X 公会計・非営利組織会計
- X I 情報会計 (コンピュータ会計, 機械化会計を含む)
- X II 会計教育
- X III 会計専門職業

- XIV 会計関連法規 (商法, 証券取引法, 税法などを含む)
- XV 伝記・人物評等 (計報を含む)
- XVI 書評・資料・翻訳その他

(2) 地域別分類基準

- A 日本
- B 中国 (台湾, 香港を含む)
- C 韓国・朝鮮
- D 東南アジア
- E 南アジア (インド, パキスタンなど)
- F 中近東・アラブ
- G イタリア
- H フランス
- I ネーデルラント (オランダ, ベルギーなど)
- J イギリス (アイルランドを含む)
- K ドイツ (オーストリア, スイスを含む)
- L 南ヨーロッパ (スペイン, ポルトガル, ギリシャなど)
- M 東ヨーロッパ・ロシア
- N 北ヨーロッパ (スウェーデン, ノルウェーなど)
- O オセアニア (オーストラリア, ニュージーランド, その他太平洋地域)
- P アメリカ合衆国
- Q カナダ
- R ラテン・アメリカ (メキシコ, ブラジル, その他中南米地域)
- S その他 (特定の地域を研究対象としないもの)

(3) 時代別分類基準

- O 古代～現代 (通史もしくは時代を特定できないもの)

- 1 古 代 (～5世紀：ゲルマン民族の大移動まで)
- 2 古代～中世
- 3 古代～近代
- 4 中 世 (～15世紀半ば：東ローマ帝国の滅亡まで)
- 5 中世～近代
- 6 中世～現代
- 7 近 代 (～第一次世界大戦終結まで)
- 8 近代～現代
- 9 現 代

以下、本稿では、分析の基礎データとして、1974年から2014年までに AHJ に掲載された954編の研究論文等、および、1996年から2014年までに AH に掲載された371編の研究論文等、合わせて1,325編を抽出し、従前の研究と同一の分類基準に拠って、個々の研究論文等において考究されている内容を分析することにした<sup>9)</sup>。

ただし、従前の研究では、『會計』等に掲載された研究論文等にはアブストラクトに相当する梗概が付されていないため、研究担当者が個々の研究論文等を手分けして解読した上で、それぞれの論文等の考究内容について、先に言及した三つの個別的分類基準と、それらを組み合わせた複合的分類基準により分析するというアプローチを用いた。しかし、そこには多分に研究担当者の主観的判断が介在する余地のあったことは否めない。そこで、本稿における研究では、分析対象として抽出した個々の研究論文等について、当該論文等の執筆者が自ら付したタイトルとアブストラクトに着目することにより、そこに記述されている文言の分析を通じて、両誌に見出される会計史研究の特性を分析することとしている。

したがって、本稿では、従前の研究におけるような、三つの個別的分類基準を組み合わせた複合的分類基準により研究論文等の考究内容を整理・分析することは行わず、あくまでも、個々の研究論文等において考究の対象とされた研

究領域・地域・時代を個別に分析し、そこに見出される特性を明らかにしている（なお、分析対象として抽出した AHJ と AH に掲載の研究論文等（計1,325編）の「論文タイトル」, 「著者名」, 「出版年」, 「巻号」を示した文献目録については、紙幅の制約から、本稿には掲載していない。かかる文献目録の詳細については、別に公表しているディスカッション・ペーパー（中野他 [2015] ([http://www.b.kobe-u.ac.jp/paper/2015\\_19.pdf](http://www.b.kobe-u.ac.jp/paper/2015_19.pdf)) を参照されたい)<sup>10)</sup>。

### Ⅲ 研究領域別の特性

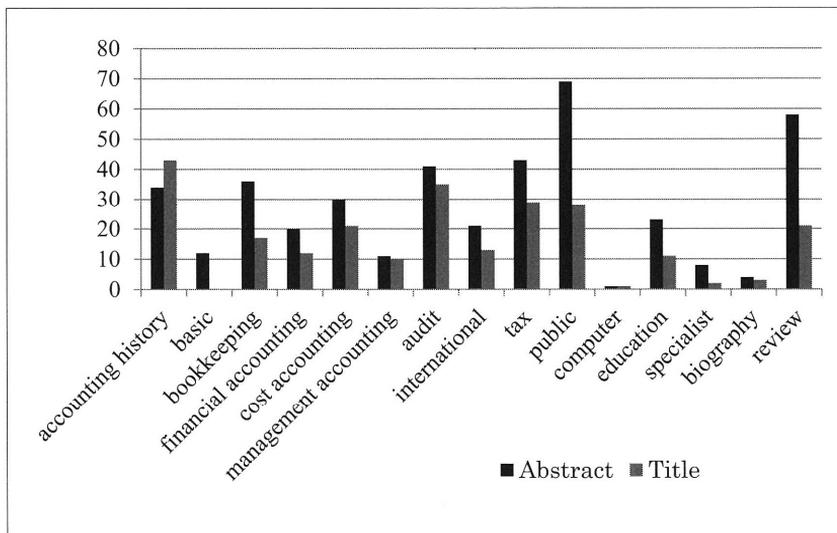
次頁に掲げる二つの図表（「図表1a」と「図表1b」）は、AHJ と AH から抽出した研究論文等のアブストラクトとタイトルから分析した、両誌の掲載論文に見出される研究領域別の特性を示したものである。

これら二つの図表に示されたヒストグラムから明らかなように、両誌を比較した場合、AHJ では“audit”、“public”とともに“tax”の頻出度が相対的に高いのに対して、AH では“tax”の頻出度はそれほど高くない。また、“bookkeeping”の頻出度がAHJ では高く、AH では低い。このことは、両誌の編集者の関心の差異を反映しているのかもしれない。

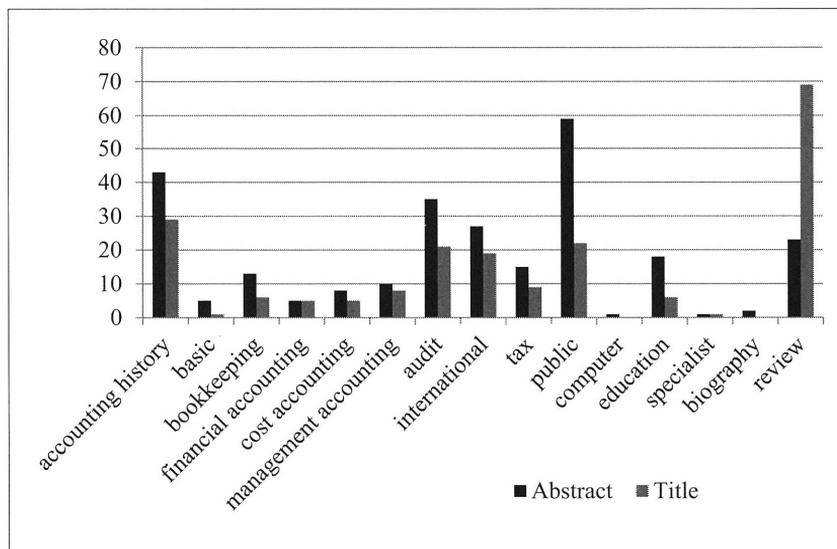
また、これらのヒストグラムから顕著に見出されることは、両誌に共通する特性として、それ自体では積極的意味をもたないと考えられる“accounting history”や“review”を除き、“public”や“audit”、“tax”といった、どちらかと言えば会計の応用領域を示唆する用語、あるいは、実務主導的なニュアンスをもつ用語の頻出度が高いことである。これは、わが国の『会計』や『年報』と比較すれば、その違いは明らかであろう。

すなわち、中野他 [2013] によれば、「・・・1983年から2012年に至る期間に『年報』と『会計』に掲載された会計に関わる研究論文等が対象とした研究領域は、両誌とも「Ⅳ 財務会計」が1位であり、これに「XVI 書評・資料・翻訳その他」（以下、「書評等」と略す）と「Ⅲ 簿記」を加えれば、これら三つの「研究領域」の合計でそれぞれ6～7割を占め、そこに顕著な差異は見出

図表 1 a : 「研究領域」別の特性 (アブストラクト&タイトル) (AHJ)



図表 1 b : 「研究領域」別の特性 (アブストラクト&タイトル) (AH)



されない。・・・」<sup>11)</sup>と指摘される。しかし、AHJ や AH では、“bookkeeping”や“financial accounting”,あるいは、“cost accounting”や“management accounting”などといった会計の主要研究領域を表す用語の頻出度は相対的に高くなく、これは特に AH において顕著である。

上記のことについての一つの解釈は、研究者のバックグラウンドの相違に起因すると考えられる。わが国の会計研究者の多くは、公認会計士などの会計専門職業人を兼ねることなく、大学院修了後ただちに研究者となっているが、海外の研究者には、PhD の学位と CPA (certified public accountant) の資格の双方を保有するケースが多いように思われる。これは、職業選択に関する志向の違いというよりも、制度上の問題が大きいと思われるが、この違いの影響はそれなりに大きいものと考えられる。

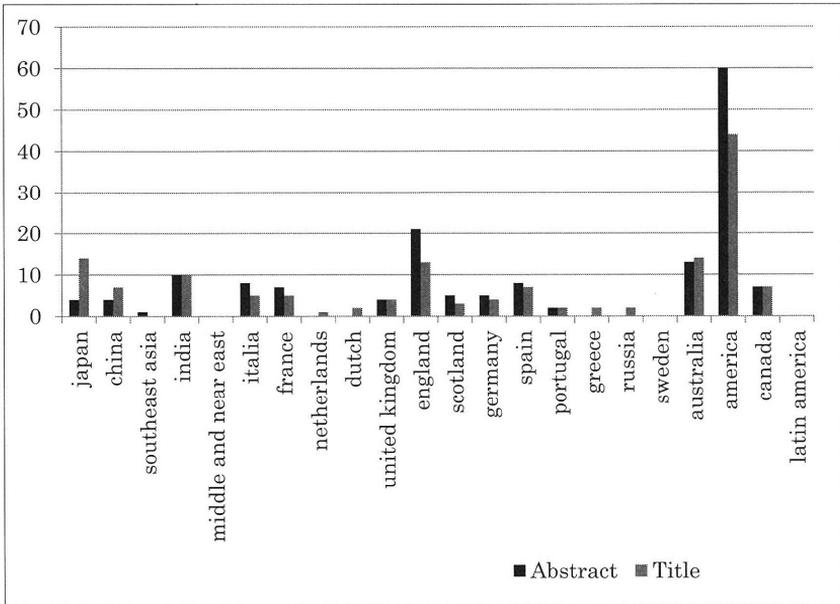
また、大学における学部教育として「経営学」の教育が確立し、経営学部または商学部が多く存在するわが国と異なり、欧米、特にアメリカにおいては、学部教育はリベラル・アーツが中心であって、経営学教育の中心は大学院、つまり、ビジネス・スクールで行われるべきものとする考え方が支配的である。そして、このような教育システムは、アメリカからヨーロッパに波及し、今日ではヨーロッパにおける伝統的な大学（たとえば、イギリスにおける、いわゆるオックスブリッジなど）においてもビジネス・スクールが併設され、高い評価を得ている。

このような教育環境の差異を背景として、会計と歴史の学際領域としての会計史の研究は、会計が元来持つ実務主導的な性格に大きく影響を受け、「歴史学」という側面よりは、むしろ「会計学」の側面が強調され、その端的な現れが、会計の制度史ないし実務面への接近であったと解釈できるのである。

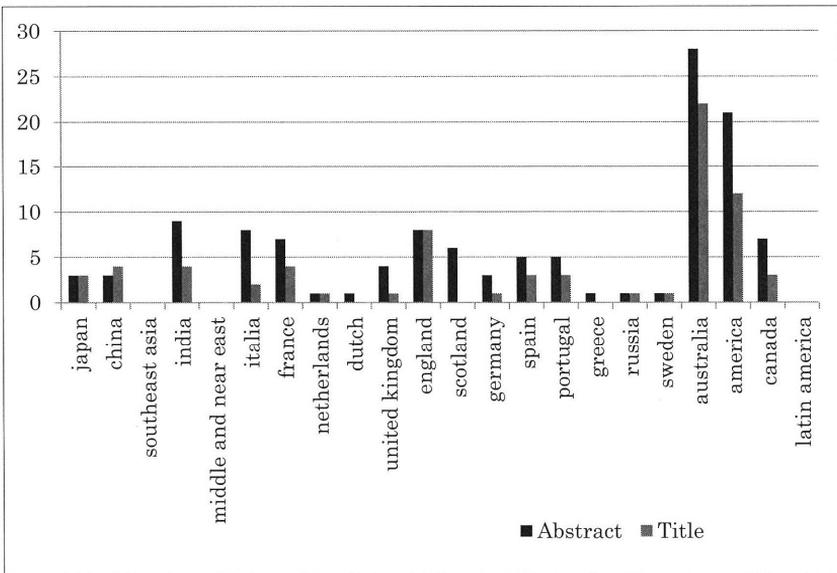
#### IV 地域別の特徴

次頁に掲げる二つの図表（「図表 2 a」と「図表 2 b」）は、AHJ と AH から抽出した研究論文等のアブストラクトとタイトルから分析した、両誌の掲載論

図表 2a : 「地域」別の特性 (AHJ)



図表 2b : 「地域」別の特性 (AH)



文に見出される地域別の特性を示したものである。

前頁に掲げた二つの図表からうかがえる地域別の特性としては、両誌が発行されているそれぞれの国自体が、地域別に見た会計史研究の中心の対象になっているということである。すなわち、アメリカで発行されている AHJ では、「アメリカ合衆国 (以下、アメリカと略記)」（“america”）を対象とするものが1位であり、「イギリス」（“united kingdom”, “england”, “scotland”）がこれに次ぐ。他方、AH は、オーストラリアで発行されており、「オーストラリア」（“australia”）を対象とするものが1位、「イギリス」（“united kingdom”, “england”, および, “scotland”）と「アメリカ」（“america”）をそれぞれ対象とするものがこれに次ぐという実態である。

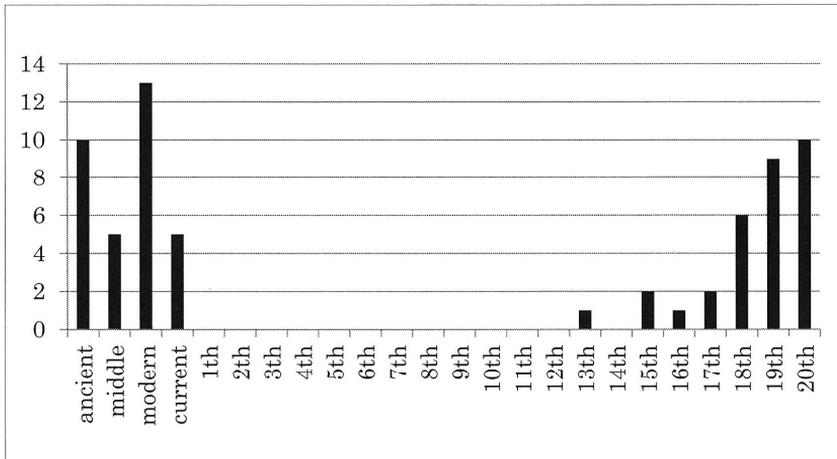
このような地域別の特性に関して、わが国の会計史研究における特性を論じた中野他 [2013] では、「・・・両誌（『會計』と『年報』：著者追記）とも共通して、「P アメリカ」, 「A 日本」, 「J イギリス」, 「K ドイツ」（さらに, 「S その他（特定の地域に考究対象を限定していないもの）」）が上位を占め、これら五つの「地域」の合計がそれぞれ全体のほぼ9割を占めている。逆に言えば、他の地域への関心は相対的に低く、わが国の会計史研究における対象地域の偏り（自国とアメリカ, イギリス, ドイツ）が両誌から如実に浮かび上がってくる。」<sup>12)</sup>と指摘されるが、地域的な偏りという観点で見ると、わが国のそれよりも、むしろ AHJ や AH の方が顕著であり、両誌ともにアングロ・サクソン系諸国の会計史を対象とする研究が主流であると言える。

また、わが国の研究論文等に多かった「G イタリア」に関しては、両誌とも関心は低く、印刷文献として世界で最初に複式簿記を解説した Luca Pacioli の「簿記論」（＝「計算記録詳論」（*Particularis de Computis et Scripturis*））を収録した彼の数学書『スママ』（*Summa de Arithmetica Geometria Proportioni et Proportionalita*, 1494）の出版500年記念の年であった1994年前後の時期以外は目立った研究成果がないように思われる。このことは、研究領域別における“bookkeeping”への関心の低さと軌を一にしていると言えよう。

## V 時代別の特性

以下に掲げる四つの図表 (「図表 3 a (1)」, 「図表 3 a (2)」, および, 「図

図表 3 a (1) : 「時代」別の特性 (AHJ) : アブストラクト



図表 3 a (2) : 「時代」別の特性 (AHJ) : タイトル

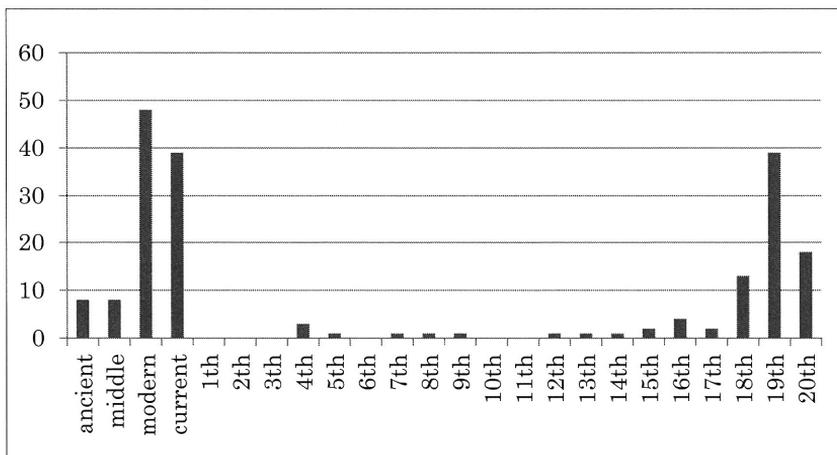
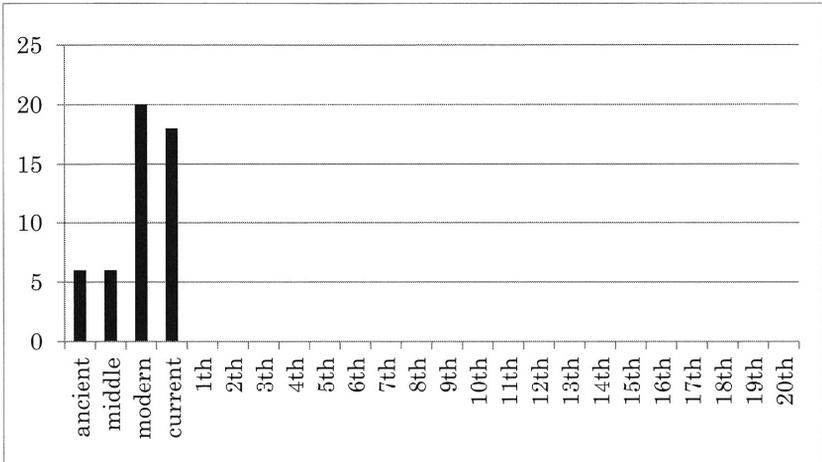


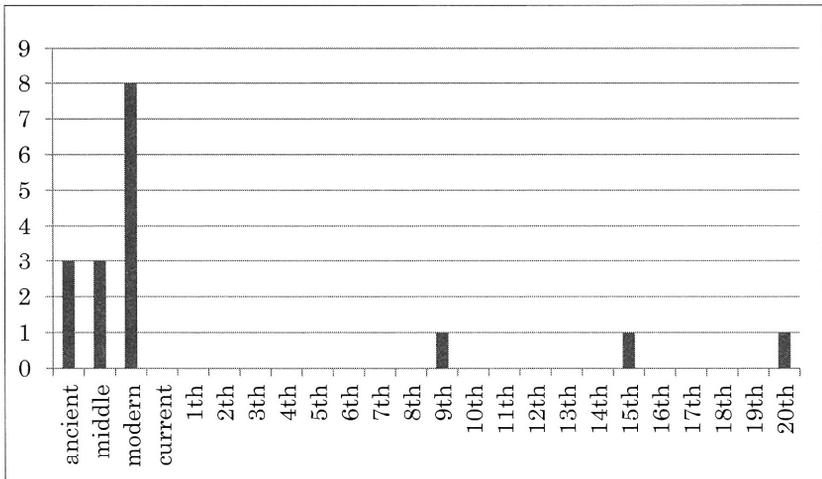
表3b(1)],「図表3b(2)」)は, AHJとAHから抽出した研究論文等のア  
ブストラクトとタイトルから分析した, 両誌の掲載論文に見出される時代別の  
特性を示したものである。

時代別の特性について見れば, 両誌の比較から把握される顕著な差異は,

図表3b(1):「時代」別の特性(AH):アブストラクト



図表3b(2):「時代」別の特性(AH):タイトル



AHJでは「○○世紀における・・・」といった表現がアブストラクトを中心にかなりの頻度で見出されるのに対して、AHではほぼ皆無であるという事実である。これは、後者が、時代による影響、つまり、社会経済的背景の変化よりも会計職能の内在的变化に注目する傾向にあるためかもしれない<sup>13)</sup>。

このような表現の差異があるものの、両誌とも、主たる研究の対象は、“modern”であって、それがほぼ18世紀から20世紀を指していると見て間違いはないであろう。なお、“current”は「最近の・・・」といった意味での使用であり、時代区分としては「現代」と見てよいかもしれないが、たとえば、AHではタイトルには現れず、強い主張ではないため、ここでは解釈を留保し、“modern”には「現代」も含まれる（近・現代）と捉えたい。

このことは、中世以前の会計史料の残存状況と収集の困難さや、イギリスとアメリカの両国が、いわゆる「産業革命」(Industrial Revolution)（または「工業化」(industrialization)）を経ての会計の近代化、あるいは、19世紀から20世紀への転換期におけるビッグ・ビジネスの出現と簿記から会計への展開の舞台であったことから見て当然の結果であると言えよう。

なお、わが国における会計史研究の特性においても、「・・・研究対象とされた「時代」については、両誌（『會計』と『年報』：著者追記）とも、「7 近代」、「9 現代」、および、「8 近代～現代」が上位を占め、これら三つの「時代」の合計がいずれとも全体の90%以上となって、そこに大きな違いは見出されない。・・・」<sup>14)</sup>のである。ただし、両誌に関連して、「・・・『年報』に掲載された研究論文等の方が、『會計』のそれよりも相対的に過去の「時代」を対象としている、換言すれば、『會計』に掲載された研究論文等の方が、多少とも現代史的内容を取り上げていると言えよう。」<sup>15)</sup>という指摘が行われている。

また、わが国の方が、同じ「近代」を対象としていても、AHJやAHと比較して、16世紀～17世紀の会計史（特に簿記史）に対する関心が高い点については留意すべきであろう。これは、明治期に入っの洋式簿記の本格的導入とほぼ同時期に会計の歴史研究が芽生え、自国における会計史を顧みる間もないまま、複式簿記の生成とその近代化の歴史、あるいは、東インド会社や鉄道会

社にみられる株式会社の創生・展開期の会計史、さらに、そこから現代へと繋がる会計史の構築に対する関心が高かったというわが国の会計史研究に見られる特殊事情が反映されているものとも考えられる。

## Ⅵ 執筆者別の特性

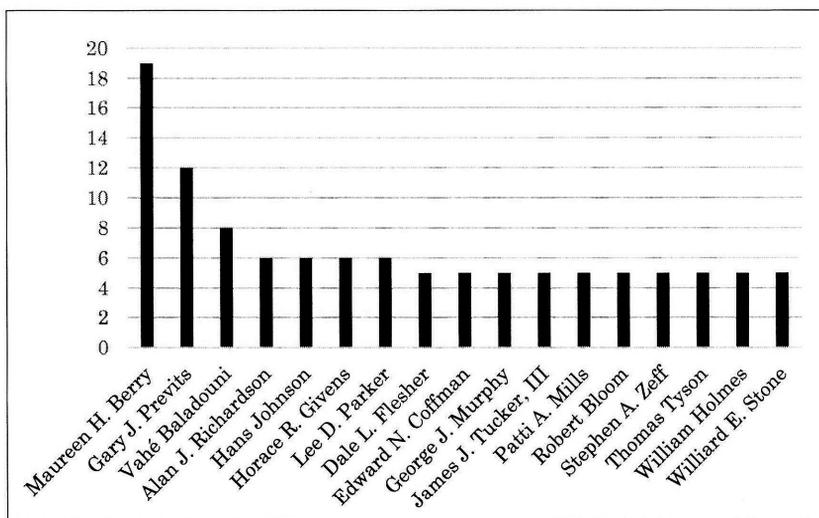
前節までにおいては、研究領域別、地域別、および、時代別に分けて、AHJとAHに掲載された研究論文等に見出される特性を分析してきた。本稿では、さらに、対象とした研究論文等を著した執筆者に見出される特性を分析することにした。

以下に掲げる二つの図表（「図表4a」と「図表4b」）は、AHJとAHから抽出した研究論文等の執筆者による論文掲載件数を示したものである<sup>16)</sup>。

このうち、「図表4a」は、AHJに5編以上の論文掲載があった執筆者の名前を上位から示している。

参考として、以下の図表に掲げられた執筆者のうち、論文掲載件数の上位2

図表4a：執筆者別の論文掲載件数（AHJ）



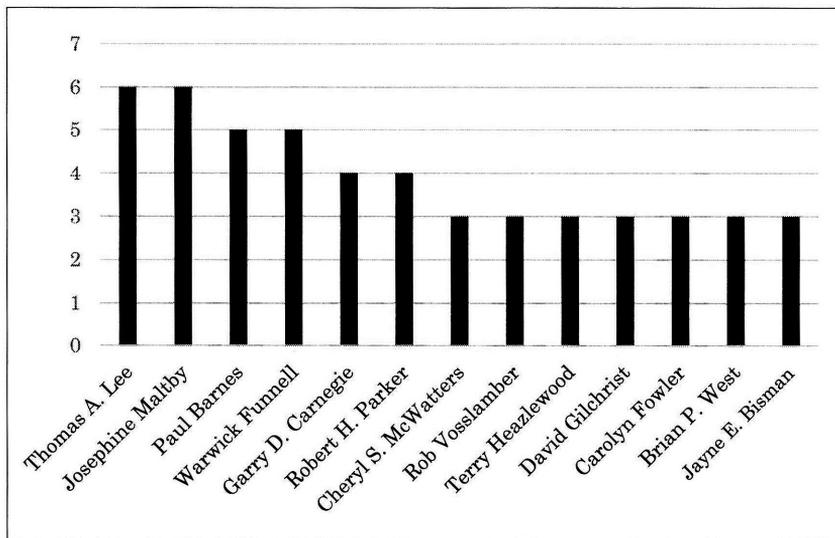
名の執筆者, つまり, Maureen H. Berry と Gary J. Previts のプロフィールについてその概略を示せば, 次のとおりである。

すなわち, AHJ の最多論文掲載者である Berry は, イギリスのロンドン南部の生まれ。1940年代にアメリカに移り, 大使館勤務や銀行員などを経て, カリフォルニア大学ロスアンゼルス校で PhD の学位を取得後, 1974年からイリノイ大学で会計実務の教鞭をとり, 国際会計の分野, 特に第三世界に関する研究で業績を上げた。また, CPA の資格を有し, 大学退職後はフリーランスのコンサルタントとして活躍している<sup>17)</sup>。

また, Previts は, フロリダ大学で PhD の学位を取得し, ケース・ウエスタン・リザーブ大学で教鞭をとり, 会計史の広範な分野で業績を上げている。また, 彼の初期の著作に会計プロフェッションに関するものがあるのは, 彼自身がアメリカ会計史学会とオハイオ会計士協会双方の会長を務めたことがあるという, 彼のバックグラウンドを如実に示したものである<sup>18)</sup>。

他方, 以下の「図表 4b」は, AH に 3 編以上の論文掲載があった執筆者の

図表 4b : 執筆者別の論文掲載件数 (AH)



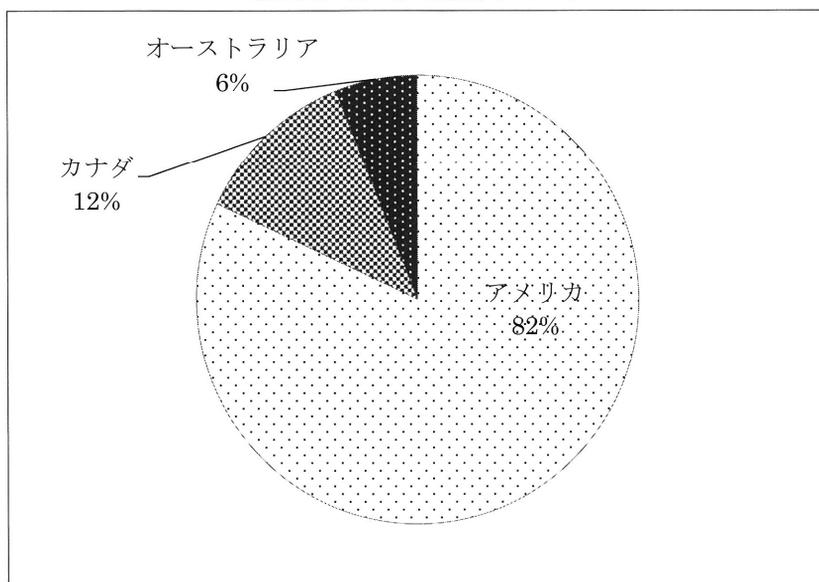
名前を上位から示したものである。

ここでも、AHJの場合と同様に、参考として、論文掲載件数の上位2名の執筆者、つまり、Thomas A. LeeとJosephine Maltbyのプロフィールについてその概略を示しておこう。

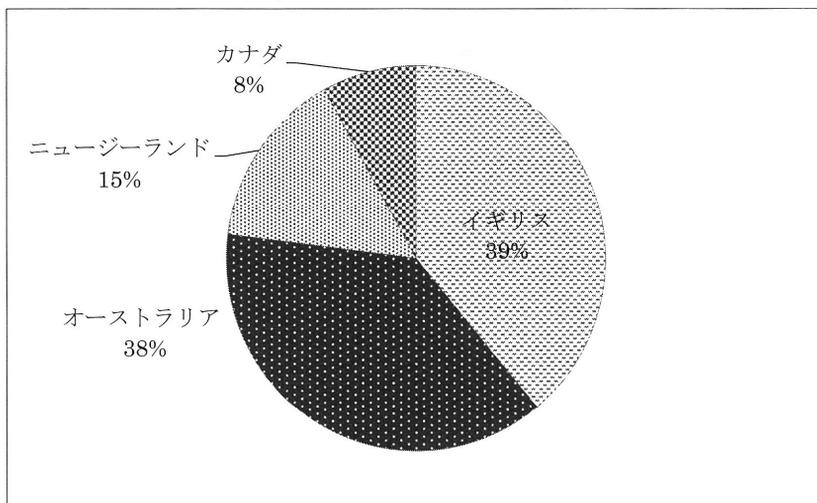
Leeは、現在、アラバマ大学名誉教授である。彼は、イギリスのストラスクライド大学でPhDの学位を取得後、長くCA (chartered accountant) として活躍した後、リバプール大学、エジンバラ大学、アラバマ大学で教鞭をとった。このようなバックグラウンドから明らかなように、彼の著作もまた、会計プロフェッションに関するものが中心である<sup>19)</sup>。

また、Maltbyは、CAであり、シェフィールド大学教授を経てヨーク大学教授。歴史的観点から、彼女の関心は、コーポレート・ガバナンス、企業の社会的責任から、投資家としての女性の活動を分析するなど幅広く、会計史分野では1947年会社法や会計における慎重性の研究などを行っている<sup>20)</sup>。

図表 5a : 執筆者の国別分布 (AHJ)



図表 5b: 執筆者の国別分布 (AH)



なお、上掲した二つの図表（「図表 5a」と「図表 5b」）は、先に掲げた「図表 4a」と「図表 4b」で示した AHJ と AH の各々における論文掲載件数の上位の執筆者についてその国別分布を示したものである。

これら二つの図表から明らかなように、論文掲載件数の上位の執筆者で見ると、その国別分布は、AHJ ではアメリカ、AH ではイギリスないしイギリス連邦に含まれる諸国が中心である。両誌ともに「国際的学術誌」ではあるが、実質的に英語圏の「地域的学術誌」という側面が強いと言える。端的に言えば、両誌ともアングロ・サクソン系を中心とした学術誌と位置づけることができるであろう<sup>21)</sup>。

## VII 結びに代えて

本稿では、AHJ と AH に掲載された研究論文等を史料に用いて、両誌に見出される会計史研究の趨勢的な特性ないし傾向を明らかにし、同時に、わが国のそれとの国際比較を行うことを目的としていた。

図表6：AHJ, AH, および、『年報』三誌それぞれに見出される特性

	AHJ	AH	『年報』
研究領域別	会計プロフェッション。税務や簿記もある程度の頻出度。	会計プロフェッション。簿記には関心が示されない。	簿記、財務会計。
地域別	①アメリカ, ②イギリス	①オーストラリア, ②アメリカ	①日本, ②アメリカ
時代別	近・現代 (modern), 19~20世紀	近・現代 (modern), 19~20世紀	中世末期から近・現代

学会の機関誌としての性格が共通する AHJ, AH, および、『年報』に見出される特性をまとめれば、上掲の「図表6」に示すとおりである。

この図表から明らかなことは、AHJ と AH はいずれも会計プロフェッションに関心を寄せており、これらに対する問題意識の発露が比較的新しい時代区分に属するために、対象とする時代別の特性は、わが国の『年報』に見出されるものよりも「現代」に近い。これは、先に述べたように、会計史研究者のバックグラウンド、さらに突き詰めれば、その出自につながる教育システムの差異から、研究者と会計専門職業人の両面を持つ欧米の研究者と、純粋な研究者が多いわが国との違い、また、高度専門職業人を養成する過程の中にある欧米のビジネススクールとその教育内容の位置づけの違いと見ることができよう。

地域別の特性については、いずれもアメリカとイギリスに対する研究上の関心が高い。しかしながら、その意味するところは、AHJ と AH はそれぞれの母国ないし関係の強い国の現状認識の分析あるいは教育資源として会計史が用いられているという解釈ができるかもしれない。イギリスとアメリカ、特にイギリスのビジネス・スクールでみられる科目名に“Development”という語が付された会計関係科目は、内容的には“History”であり、歴史的観点から現在のシステムを考える科目として構成されている。これは初期の経営史学がケース・メソッドの基礎資源を提供した様相と軌を一にしているのかもしれないが、少なくともイギリス人の歴史好き、歴史重視の姿勢がそこに反映されていることは間違いないであろう。

他方、わが国では、会計史を文字通り「歴史学」として確立する気概を持って「日本会計史学会」が創立され、大学の研究者を中心に活動が始まった。先に述べたように、わが国の研究者で会計専門職業人を兼務するものは相対的に少なく、会計史の研究はまず隣接学科目である経済史や経営史に伍すべくその学問的体系化を図ることから始まったと考えられる。もちろん、学界をあげてこれに取り組んだというわけではなく、また、大学教育、特に学部教育において会計史を教えることがほとんど期待されていなかったことから、会計専門職業人の養成といった実務的要請に従う必要もなく、研究者それぞれが個々の関心に基づいて研究を進め、その結果、中世イタリアの複式簿記生成史から現代に至るまでの数多くの研究成果が蓄積されることになった。ただし、残念ながら、海外への情報発信力（海外の学会での報告や、海外の学術誌への投稿と掲載）の弱さのために、わが国において蓄積された研究成果が海外で十分に認識されていないというのが現状であろう。

このことは、先の図表にも表れている。AHJ や AH に示される状況と異なり、わが国の研究はまだ個人の関心の範囲で行われ、全体としてのメッセージ性に乏しく、海外の学会との交流も相対的に少ないことから、研究面での、いわゆる「ガラパゴス化」現象が生じているとも考えられる。現状のままでは、残念ながら、これまでに蓄積された優れた研究成果が埋もれてしまう可能性がある。

しかし、否定的側面だけでなく、このことを肯定的に捉えれば、独自性ないし独創性を有しているという意味でもあり、わが国に蓄積された研究成果を海外に積極的に情報発信し、その成果を海外の研究者と共有することが強く求められるのである。

### 補論：Accounting History Review の位置づけと今後の検討課題

本稿では、会計史研究の専門的学術誌として創刊され、今日も刊行され続けている AHJ と AH を対象として比較研究を行ってきた。しかし、現在ではこ

れら2誌以外に、*Accounting History Review* (以下、AHRと略記)の存在が知られており、これを看過することはできない。

AHRは、1990年に*Accounting, Business and Financial History* (以下、ABFHと略記)として創刊され、年3回の頻度で発行されている。そして、その間の2010年に、現在の誌名であるAHRに改称されている。

当初の誌名が示す通り、同誌は、創刊の時点では会計の歴史のみを対象としていたわけではなく、経営や財務も含めたより幅広い歴史研究を包含しようと意図していたと考えられ、本稿における考察対象から除外した理由もそこに求められる。

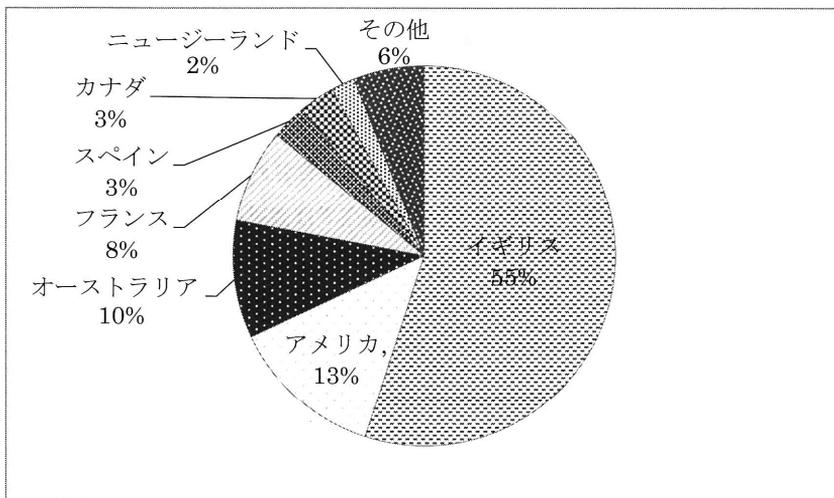
しかし、現在のAHRの研究主題は、会計、経営、管理と会計、経済学、財政学、経営学と産業、歴史、人類学と幅広く設定されるが、その主たる目的は、時空を超えて、多様な社会的・文化的、そして、多面的な制度的文脈において、会計とそれらの含意するところを学術的に探究することにあるとされる<sup>22)</sup>。

委員長等を含めたAHRの編集委員会(30人)の構成は、過半数の16人がイギリスの大学に所属し、以下同様に、アメリカ、フランスが各3人、アイルランド、イタリア、カナダが各2人、スペイン、オーストラリアが各1人となっている。ここからは、編集委員会のメンバー構成にイギリスへの偏りが見られ、「時空を超えた」学術誌とは言えない状態である。また、会計学の著名な研究者が編集委員に名を連ねていることから、専門分野としての学際性も看取することができない。ABFHからAHRへの誌名の変更もその実態の反映であると言えよう<sup>23)</sup>。

なお、ABFHの創刊から第10巻までの同誌の研究動向については、Anderson [2002]において詳細に分析されている。これを基に執筆者の国と地域の集計データを集約すれば、次頁の[図表7]のようになる<sup>24)</sup>。

この図表からも明らかなように、イギリス、アメリカ、オーストラリアの3つの国で全体の8割近くを占め、ABFHが、いわゆるアングロ・サクソン系の諸国の編集者と執筆者の強い影響の下で創刊され成長してきたことがうかがえる。

図表7：ABFHの執筆者の国と地域の分布



今日の AHR は有力な会計史研究者を編集委員会に包含した体制をとっており、会計史学全体に対する影響力は大きいと言える。それゆえ、AHR の動向が、ABFH の時代と同様の傾向にあるのか、あるいは、大きく転換しているのか、さらに、AHJ と AH、あるいは、『年報』との差異は何かといった比較研究については、稿を改めて論じることとしたい。

[注]

※ 本稿は、独立行政法人日本学術振興会による科学研究費補助金「会計史研究の展開に関する実証研究：リサーチ・データベースの作成と国際比較」（課題番号 15K03772）（平成27年度～平成29年度）に基づく研究成果の一部である。

- 1) Dafforne の “Opinion of Book-keepings Antiquity” は、彼自身が *The Merchants Mirrour*:…… において、「私の良い友人 (A Good Friend of mine)」と記している Simon Stevin (彼はネーデルラントの著名な数学者であると同時に、17世紀を代表する「簿記論」(*Vorstelicke Bouckhouding op de Italiaensche Wyse*:…… (1607) の著者でもある) の著述に依拠 (翻訳) していると言われる (Dafforne [1635], “Opinion of Book-keepings Antiquity”; see Yamey [1980],

- p.84; 中野 [2016], 98-99頁 (注 (3)))。
- 2) Foster は, *The Origin and Progress of Book-keeping*:……について, 彼がその当時所有していた150点以上の会計関係の文献に基づいて著したとするが, 同書は, 「序文」(Preface)と「文献リスト」(“Works on Book-keeping”, “American Works on Book-keeping”, および, “Mercantile Tables”)などを除けば, 本文は22頁, 全体でも自著の紹介 (“New and Popular Works, By B. F. Foster”)を含めて54頁にすぎない。しかしながら, とにかく, 「会計」の歴史を, 単行書として, 初めて専門的に取り上げたという点で, 会計史研究の歴史上, 象徴的な著作と位置づけられる (Foster [1852], p. iii; see Yamey [1980], p.90; 中野 [2016], 99頁 (注 (6)))。
  - 3) 曾田の『學課起源畧記』は, 簿記・会計の専門書でなく, 明治初期当時の新しい諸学科 (「化學」(Chemistry), 「理學」(Natural Philosophy), 「記簿法」(Book-Keeping), 「歴史」(History), 「地理學」(Geography), 「四則算」(Arithmetic), 「代數學」(Algebra), 「幾何學」(Geometry))の起源を外国の文献を基に解説した便覧の小冊子であり, その中で, 彼は, 上記のように, 一つの項目を設けて, 簿記の歴史を叙述している。その限りにおいて, 彼の論稿は, 会計 (特に簿記) の歴史を論じたわが国で最初の著作と言うことができる。ただし, 当該論稿は, 紙幅が3頁強のきわめて簡単な内容のものであった。しかも, それは, 曾田自身の創意に基づくというよりは, ドイツの官房学者であった Johann Beckmann による科学技術史関係の論文集 *Beyträge zur Geschichte der Erfindungen*, 特にその英語版にあたる *A History of Inventions, Discoveries, and Origins* (1846) に収録された簿記の歴史を解説した項目 (“Italian Book-keeping”)の抄訳である。曾田の「記簿法 Book-Keeping」, および, それと Beckmann の論稿との関連等の詳細については, 西川 [1975]; 小島 [1973] (第5章); 中野 [2015]; 同 [2016] (III, IV) を参照されたい (See also Beckmann [1783], S. 1-15; 同 [1846a], pp. 1-5 (特許庁内技術史研究会 (訳) [1999a], 41-47頁))。
  - 4) 曾田の論稿がわが国における会計史研究の先駆的著作とみなされるのに対して, 海野の『簿記學起原考』はその本格的な幕開けを画する著作である。もちろん彼の著書もまた, 一次史料の蒐集と分析が困難であった当時の状況に照らして, 海外で公表された研究成果に基づくという限界は存したが, 本文でも述べたように, 会計史を専門的に取り上げた単行書としては, Foster の著書に次ぐ, 世界でも第二番目に位置づけられる画期的な著作である。その詳細については, たとえば, 中野 [2016] (V) を参照されたい (See also 江村 [1953] (序説); 小島 [1963] (第9章); 西川 [1975]; 同 [1978]; 同 [1982] (第二部 簿記學起原考 解題))。
  - 5) 明治初期に出版された簿記解説書の多くが欧米の簿記書の翻訳ないし翻案で

あったのと同様に、曾田と海野の著作も、既述のように、欧米における先行研究の抄訳ないしそれに依拠したものであった。しかも、曾田と海野はともに、実業人、強いて言うならば学者的実業人であったのに対して、20世紀に入ると会計の専門的研究者による会計史研究の著作が現れるようになる。その嚆矢となるのが、東夷五郎の「簿記の起源及沿革」(『新案詳解 商業簿記』(1903)所収)と「簿記法古代の沿革」(『商業會計 第壹集』(1908)所収)である。東の論稿もまた海外の研究成果に依拠するものではあったが、海外の会計史研究の積極的な紹介・導人が、曾田や海野の先駆的業績の後に登場するのであり、わが国の会計史研究は東の論稿をもって新たな段階へと移行すると考えられる。彼の論稿の詳細については、中野 [2011]; 同 [2016] (VI) を参照されたい (See also 小島 [1973] (第5章3a))。

- 6) 1973年に設立された The Academy of Accounting Historians は、1974年から機関誌として *The Accounting Historians* を刊行しており、*The Accounting Historians Journal* は、前者を継承し誌名を改める形で1977年から刊行されている。本稿では、*The Accounting Historians* に掲載された研究論文等も含めてその分析対象としている (See <http://Aahhq/AHJ>) (最終閲覧2016年7月31日)。
- 7) See <http://ach.sagepub.com/> (最終閲覧2016年7月31日)。
- 8) See 中野・橋本 [1999]; 中野他 [2005]; 中野他 [2009a]。
- 9) ただし、タイトルとアブストラクトに会計に関する表現がまったく含まれていない研究論文等も存在し、これらは集計作業の過程で除外しているが、その数は、AHJ では954編中11編 (データの捕捉率は98.8%)、AH では371編中4編 (同98.9%) となっている。
- 10) 中野他 [2015], 18-38頁 (Appendix: AHJ・AH 文献目録)。
- 11) 中野他 [2013], 32頁。
- 12) 中野他 [2013], 32頁。
- 13) *Accounting History* は、「会計の、本質、役割、利用およびその影響について、批判的・説明的な歴史研究を称揚し、あらゆる組織形態にまたがる会計の歴史的展開に関する高品質な論考について、その発表の場を提供する専門的・国際的査読学術誌である」(<http://ach.sagepub.com>) (最終閲覧2016年7月31日) としており、会計のバックグラウンドよりも職能を研究対象としていることが明らかである。
- 14) 中野他 [2013], 33頁。
- 15) 中野他 [2013], 34頁。
- 16) なお、本稿の分析では、共著論文は執筆者別にそれぞれ1編とカウントしている。
- 17) See <http://news-gazette.com/news/local/2009-03-15/urbanas-maureen-berry-Woman-world.html> (最終閲覧2015年5月26日)。

- 18) See <http://weatherhead.case.edu/faculty/gary-previts/> (最終閲覧2016年7月31日).
- 19) See <http://st-andrews.ac.uk/management/aboutus/people/honoraryandvisiting/thomaslee/> (最終閲覧2016年7月31日).
- 20) See [https://www.sheffield.ac.uk/management/staff/josephine\\_Maltby/index/](https://www.sheffield.ac.uk/management/staff/josephine_Maltby/index/) (最終閲覧2016年7月31日).
- 21) 今日では、史観の相違による対立軸は、方法論という形で存在しているとも言える (See 清水 [2005])。
- 22) See <http://www.tandfonline.com/> (最終閲覧2016年7月31日).
- 23) See <http://www.tandfonline.com/> (最終閲覧2016年7月31日).
- 24) Anderson [2002], p.7 (Table 2) を基に作成。

### [参考文献]

- 海野力太郎 (纂譯) [1886]『簿記學起原考』海野力太郎。
- 江村 稔 [1953]『複式簿記生成発達史論』中央経済社。
- 小島男佐夫 [1965]『複式簿記発生史の研究 (改訂版)』森山書店。
- [1973]『簿記史』森山書店。
- 澤登千恵 [2014]「『会計史学会年報』に見る会計史研究の分析：1983～2012年」会計史学会年報, 第32号, 75-87頁。
- 清水泰洋 [2005]「会計史を巡るヒストリオグラフィー：レビュー」国民経済雑誌, 第192巻第1号, 83-97頁。
- [2013]「歴史研究の細分類」, 徳賀芳弘・大日方隆 (共編著)『財務会計研究の回顧と展望』中央経済社, 2013年, 177-188頁。
- 曾田愛三郎 (編輯) [1878]『學課起源畧説』曾田愛三郎。
- 中野常男 [2011]「わが国における会計史研究の萌芽—東夷五郎の簿記史研究を中心として—」国民経済雑誌, 第204巻第3号, 1-20頁。
- [2012]「『会計』の起源とわが国における会計史研究の展開と課題」, 千葉準一・中野常男 (共編著)『体系現代会計学第8巻 会計と会計学の歴史』中央経済社, 2012年, 1-29頁。
- [2015]「曾田愛三郎：わが国における会計史研究の先駆者—曾田とBeckmannの簿記史研究の交差—」, 国民経済雑誌, 第212巻第3号, 1-20頁。
- [2016]「わが国における会計史研究の先駆者たち—曾田愛三郎・海野力太郎・東夷五郎の簿記史研究について—」経営研究 (神戸大学大学院経営学研究科), No.62 (電子刊行物：<http://www.b.kobe-u.ac.jp/resource/br/pdf/No.62pdf/>)。
- 中野常男・橋本武久 [1999]「『会計』にみるわが国の会計史研究の歩み」経営学・会計学・商学研究年報 (神戸大学大学院経営学研究科), XLV, 125-153頁。

- ・橋本武久・桑原正行・清水泰洋 [2004] 『わが国における会計史研究の発展に関する実証研究』(平成14年度～平成15年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書)。
- ・橋本武久・桑原正行・清水泰洋 [2005] 『『會計』にみるわが国の会計史研究の展開:1917～2004年』国民経済雑誌, 第192巻第1号, 1-44頁。
- ・橋本武久・桑原正行・清水泰洋 [2006] 『わが国における会計史研究の史的分析:1917～2004年』国民経済雑誌, 第193巻第2号, 1-18頁。
- ・橋本武久・清水泰洋 [2008] 「わが国における会計史研究の展開—『會計』にみる会計史文献の史的分析:1917～2008年—」商経学叢(近畿大学), 第55巻第1号, 75-90頁。
- ・橋本武久・清水泰洋・桑原正行 [2009a] 「わが国における会計史研究の軌跡—『會計』に見る会計史文献の史的分析:1917～2008年—」経営研究(神戸大学大学院経営学研究科), No.55(電子刊行物:<http://www.b.kobe-u.ac.jp/resource/br/pdf/No.51pdf/>)。
- ・橋本武久・清水泰洋 [2009b] 「わが国における会計史研究の過去と現在—テキストマイニングによる一試論—」国民経済雑誌, 第200巻第4号, 1-23頁。
- ・橋本武久・清水泰洋・澤登千恵・三光寺由実子 [2013] 『『会計史学会年報』に見るわが国の会計史研究の特質:1983～2012年』国民経済雑誌, 第192巻第1号, 17-38頁。
- ・橋本武久・清水泰洋・澤登千恵・三光寺由実子 [2015] 「会計史研究の国際比較—*The Accounting Historians Journal*と*Accounting History*との比較分析から—」神戸大学大学院経営学研究科 Discussion Paper Series 2015-19 ([http://www.b.kobe-u.ac.jp/paper/2015\\_19.pdf](http://www.b.kobe-u.ac.jp/paper/2015_19.pdf))。
- 西川孝治郎 [1975] 「海野力太郎纂訳「簿記学起原考」について」国民経済雑誌, 第132巻第4号, 1-18頁。
- [1978] 「海野力太郎訳「簿記学起原考」の研究」会計, 第113巻第6号, 76-87頁。
- [1982] 『文献解題 日本簿記学生成史』雄松堂書店。
- 東夷五郎 [1903] 『新案詳解 商業簿記』大倉書店。
- [1908] 『商業會計 第壹輯』大倉書店。
- 安平昭二・林 昌彦(共編) [1991] 「会計史・会計学史関係文献目録(邦語) 総覧」研究資料(神戸商科大学(現兵庫県立大学)経済研究所), No.118。
- Anderson, M. [2002], "An analysis of the first ten volumes of research in *Accounting, Business and Financial History*," *Accounting, Business and Financial History*, Vol. XII, No.1, pp.1-24.
- Beckmann, J. [1783], *Beyträge zur Geschichte der Erfindungen*, Erster Band, Leipzig.

- [1846a/1846b]. *A History of Inventions, Discoveries, and Origins* (translated by W. Johnson; revised and enlarged by W. Francis and J. W. Griffith), 4th ed., Vols. I-II, London (特許庁内技術史研究会 (訳) [1999a/1999b/2000a/2000b] 『西洋事物起原 (一) ~ (四)』 (岩波文庫) 岩波書店).
- Dafforne, R. [1635]. *The Merchants Mirrour: or, Directions for the Perfect Ordering and Keeping of His Accounts*; . . . , London.
- Foster, B. F. [1852]. *The Origin and Progress of Book-keeping: Comprising an Account of All the Works on this Subject, Published in the English Language, from 1543 to 1852*, . . . , London.
- Parker, R. H. [1969], "Select Bibliography of Works on the History of Accounting," in R. H. Parker, *Management Accounting: An Historical Perspective*, London, 1969, pp.75-126 (Original text appeared in *Abacus*, Vol. I, No.1 (1965), pp.62-84; reprinted in Parker (ed.) [1980]).
- [1977]. "Select Bibliography of Works on the History of Accounting 1966-1977," in R. H. Parker, "Research Needs in Accounting History: Appendix." *The Accounting Historians Journal*, Vol. IV, No.2 (1977) , pp.7-28 (reprinted in Parker (ed.) [1980]).
- [1980]. "Select Bibliography of Works on the History of Accounting 1978-1980," in Parker (ed.) [1980].
- (ed.) [1980]. *Bibliographies for Accounting Historians*, New York.
- [1988]. "Select Bibliography of Works on the History of Accounting 1981-1987," *The Accounting Historians Journal*, Vol. XV, No.2, pp.1-81.
- Yamey, B. S. [1980], "Early Views on the Origin and Development of Bookkeeping and Accounting," *Accounting and Business Research*, Vol. X, No.37A, pp.81-92.